

## 事例番号 111 人と自然と文化がつくる遙かなまち倉吉（鳥取市倉吉市）

### 1. 背景

倉吉市は鳥取県のほぼ中央に位置する面積 272.15k m<sup>2</sup>のまちである。県庁所在地の鳥取市までは東に約 41km、県西部の中心都市米子市までは西に約 53kmの距離にあり、倉吉市は鳥取県中部の中心都市として古くから成徳地区の商店街を中心に発展して、大きな商業集積を築いてきた。まちの歴史は中世に山名氏が城下町を築いたところ始まり、江戸時代は池田藩の家老の陣屋町として発展した。

まちには大山から連なる西南部の丘陵地帯から東北部の倉吉平野へとつながる傾斜地に天神川が流れており、東から流れる小鴨川と合流して日本海に注いでいる。総面積の 67%は森林である。米、ナシ、メロン、スイカなどの農業が行われてきたが、工業面では古くは「稲扱千歯」（いなこきせんば）の生産で有名であり、近代以降は繊維、食料、金属、IT などの産業が立地している。しかし農業、工業いずれも生産額は減少傾向にある。

倉吉市の市制は 1953（昭和 28）年の倉吉町をはじめとする 2 町 7 村の合併により施行されている。人口は住民基本台帳登録人口ベースで 1985（昭和 60）年まで増加してきたが、同年の 52,638 人をピークに以後は漸減傾向をたどり、2005（平成 17）年には 49,405 人となった。しかし同年 3 月に隣接の関金町と合併して 2006（平成 18）年は 53,156 人となっている。

旧来の小売店が集積する倉吉市の中心商店街は、近年の消費者ニーズの多様化やモータリゼーションの進展による幹線道路沿線での郊外型店舗の立地等を背景に、活力を低下させてきている。後継者不足や居住環境変化もあり、中心市街地の商店街は空洞化が急速に進行している。

一方、観光においては、市内の関金温泉と周辺の「三朝・はわい・東郷」の 4 つの温泉の玄関口として、倉吉市は重要な位置を占めているが、倉吉市には温泉以外にも 1998 年に「重要伝統的建造物群保存地区」として選定された古い町並みや、2001 年に酒と醤油の香るスポットとして「かおり風景百選」に認定された白壁土蔵群・赤瓦、「森林浴の森日本百選」「日本の都市公園百選」「さくら名所百選」に選定された打吹山・打吹公園など、観光資源が豊富に存在している。さらに、2001 年 4 月には、新たな交流拠点として「倉吉パークスクエア」がオープンし、「鳥取二十世紀梨記念館」を中心に観光客が増加している。倉吉市は、これらの豊富な観光資源を活かすために各観光スポットと温泉地を広域連携させる「とっとり梨の花温泉郷」の取組みなどを通じて、観光をてことしたまち再生に取り組んでいる。



倉吉市の位置（資料：倉吉市ホームページ）

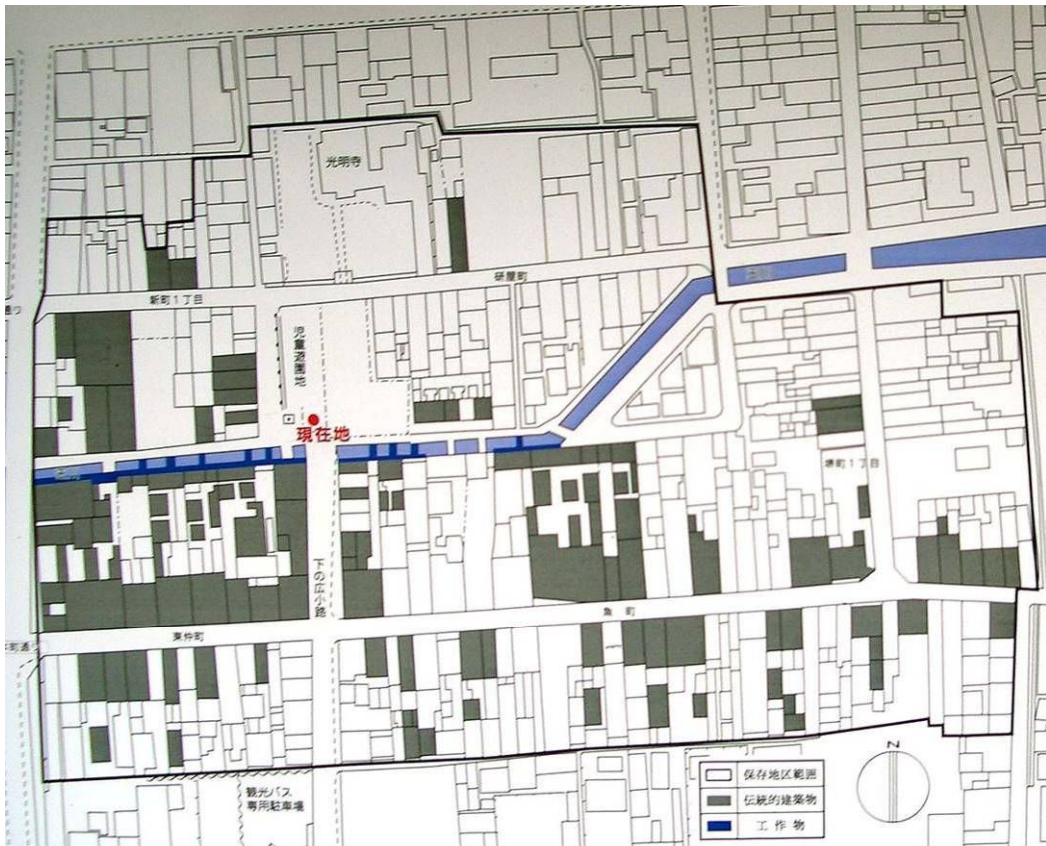


倉吉市内マップ (資料: 倉吉市観光協会)



白壁土蔵群・赤瓦周辺マップ (資料: 倉吉市観光協会)





打吹玉川伝統的建造物群保存地区(4.7ha)案内図



白壁土蔵の伝統的建築物 (写真提供: 倉吉市)

## 2. 目標

「第10次倉吉市総合計画」(計画期間:2006年度からの10年間)は、将来都市像を“人と自然と文化がつくる「キラリと光る新中核都市」”とし、以下の「まちづくりの基本目標」を掲げている。

- ① 環境にやさしく快適で安全なまちづくり
- ② 豊かな心と文化を育むまちづくり
- ③ 快適な暮らしと交流を支えるまちづくり
- ④ 地域特性を活かした活力あるまちづくり
- ⑤ 誰もが健やかにいきいきと暮らせるまちづくり
- ⑥ ともにつくる協働と交流のまちづくり

鳥取県では、「行政の鳥取、商業の米子、文化の倉吉」と言われるように、3つの都市がそれぞれの特徴をもった中核都市として存在している。上記の目標は、この倉吉の都市の性格を活かしてまちづくりを進めていこうとするものである。

「人と自然と文化がつくるまち」とは、具体的には「人と自然が共生し合い、そこに市民が快適に働き、学び、遊び、憩うことができ、また出会いやふれあいのある交流ができるまち」(第10次倉吉市総合計画)を意味する。その前提となるまちづくりの基本理念は「豊かな自然と人とのつながりの中で、潤いと安らぎのある生活基盤を創造するとともに、子どもから高齢者まで、すべての市民がいつまでも安心して暮らせるまち」(同)をめざすということであり、人間中心の都市をつくるということである。



中心市街地活性化基本計画計画策定区域

一方、倉吉市では観光振興のコンセプトとして“地域資源を活用したまちづくり「遙かなまち倉吉」”を掲げている。市内の白壁土蔵群一帯は、地域資源である江戸時代からの古い町並みが残るまち、八橋往来が残るまち、伊能忠敬の足跡が残るまち、そしていつか見た風景が残るまちであり、倉吉を代表する観光の中心地である。これらすべてが本物であり、本物と出会える場所であることから、倉吉市は観光まちづくり推進のテーマを

「遙かなまち倉吉」～ ほんものに出会えるまち(本物至高)～

と設定し、まちづくりの展開を図っている。生活の香りのする古い街並みや懐かしさと癒しを感じさせるまちの風情、日本の原風景を大切にすることが観光戦略の要になっている。

(参考) 谷ロジロー作「遙かな町へ」

「遙かな町へ」は1998年に「ビッグコミック」(小学館)に連載され、1999年第3回文化庁メディア芸術賞漫画部門優秀賞、2003年第30回アングレーム国際漫画フェスティバルベストシナリオ賞などを受賞した。この物語は、主人公が故郷の倉吉市で34年前にタイムスリップしてしまうというもので、当時の倉吉の街並みが息づく、どこか懐かしい作品である。江戸時代末期から明治・大正期の古い商家の街並みが今なお残る倉吉市は、本物の地域資源を活用する懐かしさと人のぬくもりが感じられるまちづくりを目指し、この作品のタイトル「遙かな町へ」をテーマにした「遙かなまち倉吉」の創出をめざしている。



©谷ロジロー『遙かな町へ』小学館

### 3. 取り組みの体制

上記理念の下、倉吉市ではまちづくりを身の回りのできることからひとつひとつ積み重ねてやっていこうという姿勢をとっており、様々な組織が連携してまちづくりに取り組んでいる。主な民間団体に「協同組合打吹」、「榎赤瓦」、「伊能忠敬の足跡をたどる協議会」、「打吹地区歩行ネットワークを考える会」、「NPO 法人サカズキネット」、「八橋往来まちなみ研究会」「あきない中心倉」等があり、これらと地元住民、商工会議所、商店街、市等が連携してまちづくりを進めている。



## 4. 具体策

### (1) 第3セクター「株式会社赤瓦」の設立と活動

倉吉市は上述のように文化都市としての性格を強く持っているが、また、江戸時代から稲扱千歯(いなこきせんば)や木綿(倉吉緋(かすり))などの生産を中心に商工業都市としての性格も持ち、それにより白壁土蔵群の街並みが形成された。この伝統的な街並みを生かしてまちを再生しようという動きが出て(背景には「外観を見るだけで中を楽しめない」という観光客の声があった)、その事業を実施する目的で株式会社赤瓦が設立された。株式会社赤瓦は土蔵等を観光スポットとして再生させて大成功をおさめ、いまや「赤瓦」が倉吉市のまち再生の代名詞ともなっている。まちづくり組織と赤瓦の歩みは以下のとおりである。

1992(平成4)年

成徳地区(倉吉市の中心地区)が特定商業集積法に基づく調査対象となり、倉吉商工会議所の青年部中心に活性化策の議論が始まる。そして、市、商工会議所中心の「倉吉成徳地区まちづくり基本構想委員会」の報告書にまちづくり会社設立構想が盛り込まれる。

1993(平成5)年

構想を受け「せいとく街づくり会社設立研究会」が発足して検討が重ねられたものの、構想の規模が大きくなり実現には向かわなかった。しかしその過程で地元建築家等を中心とするグループから、土蔵を活用してとりあえずできることから始めるという考え方が出てくる。1995(平成7)年には「せいとく街づくり会社設立準備会」に移行した。

1996(平成8)年

「特定分野組織化推進懇談会(せいとく街づくりグループ)」が発足し、白壁土蔵群を活用したまちづくり策が打ち出され、市、商工会議所等の協力の下、まちづくり会社設立実現が視野に入ってくる。

1997(平成9)年

中心市街地の活性化と観光振興のバランスを重視しつつ個人の意見を集約するために「協同組合打吹」が設立された(地元商店街等の出資、エリア外からも出資あり)。さらに同協同組合と倉吉市、商工会議所、地元金融機関の出資により第三セクター「株式会社赤瓦」が設立された(民間主体)。資本金は当初3,000万円、その後増資されて9,000万円となる(協同組合打吹3,850万円、赤瓦持株会2,100万円、倉吉商工会議所900万円、倉吉市500万円、地元金融機関1,650万円という構成で、民間主導型)。県、市の「先駆的商店街にぎわい創出モデル事業」の補助金を用い、土蔵改修を開始した。

1998(平成10)年

赤瓦1号館、2号館、3号館が順次オープンした。同年、付近を含む一帯が文化庁により「重要伝統的建造物群保存地区」に指定される。中心市街地活性化イベント「光の回廊」「赤瓦市」が始まる。以後毎年継続している。

1999(平成 11)年～2000(平成 12)年

赤瓦 5 号館～8 号館オープン

2001(平成 13)年

中心市街地活性化協議会開催

「伊能忠敬の足跡をたどる協議会」設立

国土交通省中国地方整備局『八橋往来』夢街道認定

2002(平成 14)年

『八橋往来』鳥取県町並み整備コンテスト入選

「あきない中心倉(近隣商店主を中心に)」設立

観光ボランティアガイド本格活動開始

まちづくり NPO 法人「サカズキネット」設立

「打吹地区歩行ネットワークを考える会」発足

2003(平成 15)年

まちづくり総合支援事業(歩行ネット事業、打吹公園整備事業 等)

5 月 白壁土蔵周辺火災発生。復旧支援活動

10 月 倉吉町並み保存会(成徳地区)設立

2004(平成 16)年

チャレンジショップ「あきない塾(3 店舗)」開店

赤瓦 3 号館・赤瓦 7 号館元帥酒造倉都家復旧

火災現場(肥料桑田)復旧計画骨子決定

2005(平成 17)年

淀屋牧田家再生プロジェクト発足

防災センター「くら用心」オープン

火災跡土蔵修理開始

赤瓦 10 号館オープン

1、2、3、8 号館は㈱赤瓦が賃借した直営店であり、5～7 号館は協同組合打吹の組合員が経営する既存店である。10 号館は行政・商工会議所・地元短期大学等の連携により運営する施設を赤瓦グループとしたものである。直営店の建物の整備・運営は㈱赤瓦が、店舗構成の企画・運営は協同組合打吹が行っている。以上のように、当初は市の主導で検討が開始されたまちづくり会社は、最終的には民間主導、行政・商工会議所支援という形で実現し、赤瓦は大成功をおさめて今では年間約 32 万人の訪問者を得ている。最も大きな成功要因は、地元にあるものを活かして最小限の費用で事業を実施し、従来のただ観るだけの場所を、「見る、食べる、買う、休む」という機能を総合的にもつ滞留型の観光スポットに再生した点にある。



白壁土蔵のまち 散策絵図 (資料: 倉吉市)



天女壁画、背後は市の中心部にあり市民の心のよりどころとなっていると言われる打吹山





赤瓦 1 号館外観



赤瓦 1 号館内部



赤瓦 2号館入口



赤瓦 2号館内部





赤瓦 3 号館外観

## (2) 「あきない中心倉」の発足

成徳地区の歴史・伝統・文化を掘り起こし、これを地域資源として再生、活用することにより、中心市街地の活性化を図ることを目的として、「あきない中心倉」という組織が 2002 年に発足した。この組織は成徳地区の商業者 21 人(活動に賛同する地区住民を含む)が発足させたものである。

商業者団体と地域住民組織等とのコラボレーション事業として、あきない中心倉が、成徳地区振興協議会、成徳小学校などの地域住民と連携して、地域資源である 3 名の仏師の作品(福の神)を街に並べるなどの活動を行っている。①福の神まつり、②福の神街角ギャラリー、③福の神食談会、④福の神にあえる街並み整備、⑤その他(成徳お宝市、長谷の観音市など)の事業を通じて『福の神にあえる街』をつくり、地域住民と観光客との交流の中から倉吉固有の文化やたたずまいを再発見する事業である。

## (4) 「若者いきいきカフェ実験調査事業」

倉吉商工会議所、鳥取短期大学、赤瓦、県、国土交通省倉吉河川国道事務所、市が連携して「若者いきいきカフェ実験調査事業」が実施されている(2005 年 12 月 3 日オープン)。倉吉市はこれまで鳥取短期大学との連携はあったが、学生と連携して事業を実施するのはこれが初めてである。

施設は「赤瓦 10 号館」として、市が商工会議所に管理運営を委託。商工会議所が琴桜観光駐車場前の空き店舗を賃貸し、短大生がカフェを運営している。施設名称の「赤瓦」は、本地域の観光ブランドとして定着している名称を用いて地域との連携・発信力の向上を図るために付けられた



ものである。中心市街地の魅力づくり・賑わいの創出を図ることを目的としており、以下の 4 つの機能の拠点となっている。

① 「町屋カフェ“和気(わき)”」

短大生と地域住民とによるまちづくり活動・交流活動の拠点としての、地産地消をテーマとしたカフェ。鳥取短期大学の学生が運営している。

② 「倉吉観光案内所」

立地を最大限に活かした観光案内所。倉吉市観光協会が運営している。

③ 「くらし若者広場(若者就業支援出張窓口)」

若年者就業支援出張窓口(ジョブカフェ)。鳥取県中部県民局が運営している。

④ 地域資源の活用

(5) 歩行ネットワークの形成

① イベント

赤瓦の成功を中心市街地再生に結び付けるためには、人々の回遊性を高める必要がある。それを促進するために、協同組合打吹がさまざまなイベントを主催、協賛して赤瓦から地元商店街への人の流れを生み出すべく努力してきている。イベントの中でもっとも知られるようになったのは「土蔵まつり・光の回廊」である。これは、赤瓦から地元商店街への路傍にガラス瓶の灯籠やかかり火を並べるとともに商店街の営業時間を延長するものである。

② 「倉吉パークスクエア」

2001(平成 13)年に赤瓦から 1km 程のところ「倉吉パークスクエア」がオープンした。これは、日本初の梨の博物館「鳥取二十世紀梨記念館」を中核とする文化・観光・教育施設であり、市はこれを第三の中心市街地と捉えている。県の施設は県の財団法人が運営し、市の施設は市が運営している。年間の来訪者は約 100 万人であり、「倉吉未来中心ホール」の稼働率は約 60%に達している。同ホールは市内小中学校の発表会にも使われており、市民に喜ばれている。パークスクエアでは月に 1 回、鳥取・島根で最大のフリーマーケットが開かれており、その際は駐車場 700 台では足りないくらいの人が集まっている

③ 歩行環境整備

「伊能忠敬の足跡をたどる協議会」の活動により、伊能忠敬が文化 10 年(1814 年)に測量した倉吉の道が西側地区中心に今でも約 98%も当時のまま残っていることが明らかになった。そして、その地区が「夢街道モデル地区」(国土交通省)に指定されたことを契機に、市中心部と西部地区とを結ぶ歩行ネットワークをつくる構想が浮かび上がった。それを実現するために「打吹地区歩行ネットワークを考える会」が創設され、市民や経済人等さまざまなメンバーが実際に歩いて整備計画をつくった。その計画に市の「まちづくり総合支援事業」が適用されて実際に整備が行われることとなり、「NPO 法人サカズキネット」が市から受託して整備事業を行った。その基本理念は「地考・地産・地造」というものである。地元の人のこだわりのもとに地元のもの(町名、町紋、石等)を用い、地元の人(陶芸家等)に制作を依頼するという方式で、標識、ベンチ、照明器具等を整備した。

#### ④ 街なみの環境環境

公衆トイレの整備等が行われてきている。トイレは現在までに 29 箇所設置されているが、まちづくりセンターを併設する等さまざまな工夫が行われている。2004(平成 16)年度からは市の広い範囲で「街なみ環境整備事業」を導入する目的で調査、計画策定が行われている。その作業は「八橋往来まちなみ研究会」が担っている。

#### ⑤ 「淀屋牧田家再生プロジェクト」等

2004(平成 16)年度は打吹公園開園 100 周年を記念し、まちづくり交付金を活用して公園の再整備や道路、駐輪場、案内板等の整備を行った。2006(平成 18)年度には、旧牧田家の建物を「淀屋牧田家再生プロジェクト」として歴史的建造物保存活用事業(まちづくり交付事業)の対象にすることとした。同建物は江戸時代の有力商人牧田家の住宅で、市内に現存する最古の商家建設であり、また、倉吉を代表する商家「淀屋清兵衛」(大阪の岡本淀屋の跡地で商売を展開)ゆかりの家でもある。市は建物が所在する主屋と付属屋の土地及び付属屋建物の購入を行い、保存整備することとしている。旧牧田家建物は、地域のまちづくりの拠点として、また、伝統文化の保存活動の拠点として活用される予定である。

#### (6) 地域資源を活かした観光商品の開発

倉吉を舞台とした谷ロジロー氏のコミック「遥かな町へ」と観光とのコラボレーション事業「遥かなまちへ倉吉・探訪ツアー」を 2006 年 4 月から実施している。これは、観光客の滞在時間の延長と地域資源の活用に向けた新たな試みとして取り組んでいるものである。マップに落とし込んだ漫画のカット十数カ所を実際の風景と見比べながら探し出す倉吉独自のまち歩きツアーであり、白壁土蔵群・赤瓦周辺の江戸時代から続く古い町並み、昭和の色彩が残る古いアーケードや看板など、どこか懐かしさを感じる町並み散策が全国の観光客・旅行者の反響を呼んでいる。

その他、倉吉市には、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」のモデルとなった里見公終焉の地、「淀屋橋の名を残す大阪の豪商・淀屋」と倉吉の縁など、未だ世に出てない歴史的資産がある。これらをまちづくりの資源として全国に発信する観光商品の開発が具体的に進められている。



街かどの案内板、標識、ベンチ



標識、ベンチ



## 5. 特徴的手法

### (1) 身の丈に合った持続可能なまちづくりの推進

「規模は小さくてもできることから始めていく」という理念がまちづくりの基本にある。今できることを具体的に考えるという姿勢、すなわち「金ではなく頭を、ないものねだりではなく今あるものを、資金を単に増やすのではなく目的意識を共有できる仲間を」(倉吉市商工観光課)という「倉吉らしさ」をさらに発展させ、「まちづくりの課題を地域全体で共有し、共通の目的を持ち、それぞれの立場でとにかく具体的に実践」し、地域の特性を活かした商業をベースとした観光商業まちづくりを進めている。

倉吉市は旧中心市街地を成徳小学校の校区と捉え、市民のためのまちづくりを行うことを目的としていたため、当初は観光振興という意識はなかった。結果的に赤瓦によって観光客が来るようになったということである。また、市内には従来これといった飲食店がなかったが、地元の製餅店が「清水庵」という飲食店を始めたところ利益が出たことから、後に続く店が出てきた。現在では伝統的建築物をうまく生かした様々な店ができて人気を呼んでいる。

政策の評価手法としては、第10次倉吉市総合計画にさまざまな「施策評価ベース」(目標値)が掲げられている。例えばまちづくりに関しては以下の指標がある。

- ① まちづくり活動や行政活動に参画している市民の比率  
〔2004年度〕 27.8% → 〔2008年度〕 36.0%
- ② まちづくりビジョンに基づき積極的な活動を組織的に行っている団体数  
〔2004年度〕 283団体 → 〔2008年度〕 295団体
- ③ 保存されている文化財数  
〔2004年度〕 74件 → 〔2008年度〕 81件

### (2) 官民連携、官民協働によるまちづくり・観光振興策の推進

地域住民、観光ボランティア、まちづくり組織、商店街、大学、市、商工会議所、県、国等の役割分担を明確化し、相互の連携を図りながら、まちづくりや観光振興策を立案、実施している。

### (3) 地域資源を有効に活用した観光振興策の立案・実施

歴史・伝統・文化、自然、温泉、町並み・景観等の地域資源、観光資源を活用して交流人口の増加を図っている。

## 6. 課題

地元では若者の定着が最重要課題との意識がある。環境整備に関しては、歩行ネットワークの強化、拡大を図ることがこれからの課題になっている。そのためには、潜在的な地域資源を発掘、顕在化することにより、更なる観光資源に厚みを増し、一層の長時間滞在、滞留の仕組みづくりを進めることも重要になっている。「倉吉ブランド」の確立と情報発信を行い、国内外からの観光客の集客を図ることも課題である。また、観光が持続可能なものとなるよう、人材の育成や、滞在型・体験型・目的遂行型へ向かう観光の潮流を読んだソフト・ハードの受け皿づくり(宿泊、飲食施設等)、仕組みづくりが重要となっている。

(参考・引用文献)

倉吉市ホームページ

赤瓦ホームページ

牧田憲一「まちづくり会社で滞在型観光へ脱皮 光の回廊が商店街の回遊促す」(『月刊 地域づくり』2002年1月号)

里見泰男「中心市街地再生の長い道のり」(「住まい・まちづくり活動推進協議会」資料)

日本施策投資銀行地域企画チーム編著『中心市街地活性化のポイント』ぎょうせい、2001年  
国土交通省都市地域整備局都市総合事業推進室『「元気なまちづくり」のすすめ』ぎょうせい、2004年

佐藤滋＋城下町都市研究体編著『図説 城下町都市』鹿島出版会、2002年